

可觀小説卷卅五

一、能州の鼠害

去年丙辰秋頃、能州海邊に鼠多く相見え人々怪み候。海中より涌出候様にも申、或はうるめいわしの類の化する所かとも申候。冬中地中へ隠れ、春に至り山野に遍満し候故、土方領一萬石分只今は御預け地、凡村數六十有餘有之處三十箇村に及び、此方御領分の内は三百九十箇村に及び、麥根等を齧盡し、山に至りては木根をも齧候。土方領にて辛皮村の牛三頭齧殺候。牛の脊骨を喰候。二月に至ては此方御領内奥郡にて、馬十一疋喰殺候。田物の儀は不及申候。中居村の三右衛門注進十一日に到來、即日郡奉行不破仲太夫・開作奉行栗田源右衛門・芝山三郎左衛門兩人并御預地奉行河合七郎左衛門可遣旨、年寄衆御申渡候。十八日發出。余謂鼠害天物、一日を寛うすれば一日の害あり。去秋以來捕收之策を議する者なし。故に如是遍満す、悲哉。

一、文獻に見えたる鼠害

明隆慶辛未夏秋大水、斬黃瀨江之地驗鼠遍野、皆鯽魚所化。

蘆稼諸根齧食殆盡。此物怪也。見註 鼯音焚。説文云。行地鼠一曰鼯鼠。云。伯勞所化非也。江戶來狀云。今日前田帶刀殿被齧、昨日古郡も入候やと尋に參候。去春石州にも野鼠出候、麥作の時分にて悉く喰盡し、牛馬も齧れ後には人にもあたり候。何とも可防様も無之候處に、秋に至りいつとなく次第に鼠も相止申候由、咄し候旨被申 能州の鼠も常鼠にあらず、尾短く形小うして休弱し。地中に伏行して高きに登ること不能、是鼯鼠の類ならん。大小形色大抵有四品、大なるは常鼠より稍大にして虎毛なり。此鼠は害なし。至て小さき鼠の嘴鳥嘴の如し。此鼠其害をなすこと至て甚し。田のうねに産育するを見れば、一産に二十子あり。猫をして捕へしむれば殺して而不食。

一、宋高宗紹興丙寅の夏秋之交、嶺南州縣久く不雨、清遠・翁源・眞陽の三邑苦鼠害甚し、魚鳥蟲蛇皆化して成鼠、數十群を成し禾稼是に因て空虚す。眞陽の報恩寺の耕夫一鼠を得たり。臆猶蛇文あり。又漁父或夜網を設て鱗數百を得たり。取て見れば悉く鼠となる。數月を踰て始めて息む。是故米價貴し。次年の秋始めて平なり。

一、元至二十二年乙酉六月。馬湖部田鼠食稼殆盡。甚總管祠而祝之。鼠悉赴水死。

一、能州二月末に至り、鼠の齧には非ずして牛馬の斃死すること百餘頭に至る。鼠毒に觸侵する者と云。

一、勝尾半左衛門等の盜難

二月三日夜本郷御邸御殿宿直の頭は、勝尾半左衛門に候處、夜深寢入候内、枕邊に指置候紙袋を盜取候者有之跡にて、夜明泊番の防守見付候。袋の内には有之品々皆取散し、御殿の廊下に捨置候。則其趣半左衛門へ申達候。半左衛門致點檢候所、入置候金銀不殘相見不申候。其外の品々は皆無別條有之候。早速半左衛門御次まで罷越、御近習頭へ迄申述達御聽候。將又此夜泊番の御歩五人有之候内、三人の鼻紙袋も同じ様に盜取、金子有之分は不殘取之、袋并外の品々は皆其邊の廊下に捨置候。半左衛門組の者共の事故、便其趣達御聽候。

一、夢得の歌と句

享保五年
庚子の歳十一月念四日夢得の句。

石を重ねかさねかさぬるいはほかな

辛丑二月二日夢得の和歌。

もろともにも八千世經ぬらん玉椿まくらも高し秋の夜の月

正徳四年
甲午春二月十五夜。

梅に匂ひ花に飛かふ宿の春

寶永七年
庚寅六月十四日曉夢。

花や雲くもや嵐の聲添て

覺後復夢改吟。

雲や花花や雲路の色添て

某年。

隔りし八重九重の空ながらかよひてすめる月の影かな

十二月廿七日夜。

まめにやまめをはやすことの葉

霧の戸も暮なば松の蔭みえて

夢想連歌。

越の山うれしき夏の深雪かな

しげる高根につゞく蒼海

子規聲の行衛は浦かけて

波しづかなる此の泊船

假臥の枕に月や残るらん

野邊はみながら露ぞみだるゝ

女 女 齊 賢
北 堂
禮 幹